

「講義の聴解」の目指す理解促進のための 基本目標と授業活動について

太田 亨

I. はじめに

「講義の聴解」^{注1}，金沢大学留学生センターが提供する「総合日本語コース」^{注2}内の「技能別クラス」の1科目として，総合コース開設時（1998年10月）から筆者が担当している。

本稿では，この「講義の聴解」授業で筆者がとる基本目標とそれを実現させるために授業で行っている教室活動を中心に紹介する。そしてさらに，筆者の授業の基本目標と活動が総合コース内で筆者が提出したシラバス到達目標を達成しているか，そして一般的に「聴解」，特に「講義聴解」で必要と言われる聴解スキルと比べて筆者の目標との異同点，等の問題について考察を加えていく。

II. 「講義の聴解」授業の位置づけ

「講義の聴解」は上述の通り，総合コースの技能別クラスの一つであり，対象学習者の日本語力を「日本語D」レベル中心と設定し，C2^{注3}及びEレベルの学習者も合わせて受け入れている。現在の日本語Dレベルの主教材が『文化中級日本語2』（文化外国語専門学校，凡人社）であることから推して，絶対的日本語レベルはおおまかに想像できるであろう。

対象学生は金沢大学内の各種プログラム（日本語・日本文化研修コース，金沢大学短期留学プログラム，日韓共同理工系学部留学生コース，日本語研修コース〔以上，留学生センター所属〕，研究生，科目等履修生，大学院生，外国人教職員など）からの混成クラスであり，学生の専攻分野も文系・理系さまざまである。所属プログラムの規定により，総合コースの日本語学習が単位として認定される場合もあり（日本語・日本文化研修コース，金沢大学短期留学プログラム），認められない場合もある。

つまり総括的に述べると，大学の研究・教育環境にありながらも，基本的には日本語力がまだ発展途上にある学生を対象にしている，とまとめることができる。

「講義の聴解」シラバスに記された全体的な授業目標は，「大学での講義を聞き取る

のに必要な聞き取りストラテジーを学び、いくつかの講義の聞き取り練習問題を通して、大学での研究・学習生活に支障のない聴解能力を養うことを目的とする。」であるが、総合コース内の1科目であることから、すぐ上で触れたとおり、日本語力が発展途上にある学生を対象として、特に大学での講義を聞き取るための聴解力を養成するためのスキルをつけることに主眼を置いている。スキルの詳細については後述する。

Ⅲ. 聴解における「理解」と「講義」の聴解に一般的に求められるスキル

講義聴解のための聴解スキルが一般的な聴解スキルと質的に異なることを指摘したのが、Munby (1978: 121, 128-9) の「35~39グループ」のスキル、そしてさらにRichards (1983: 229-30) の18項目にわたる講義聴解スキルであることはよく知られている。しかしながら、同じRichards (1983: 228-9) で取り上げられた33項目にわたる会話聴解スキルと講義聴解スキルとを比べると、基本的に重複するものがあることが分かる。

そこで、先行研究で挙げられている聴解スキルを講義聴解の場合も含めて筆者なりに以下のように整理してみた。^{注4}

A. 一般的な聴解スキル^{注5}

- ① 視覚から入る共起情報（板書，ハンドアウト，グラフなど）との連携
- ② キーワード選別聴取と不要な音声の聞き流し
- ③ 既知知識（音声・語彙・文法・文脈・背景・専門）の利用・活用
- ④ （既知知識を使った）予測または推測

B. さらに講義聴解に必要とされるスキル^{注6}

- ⑤ 専門語彙の選別聴取，分野ごとの構文などの統語パターンや論理展開への慣れ
- ⑥ 内容の専門性や高度な知識
- ⑦ ノート・テイキング
- ⑧ 授業の先に待ち構えている試験での答案またはレポート書き

Aの①から④までのスキルは講義聴解の場でも用いられなければならないことは当然である。その上で、講義聴解にはBにまとめた⑤から⑧までのスキルが要求されると筆者は理解している。

さらに、一般的な聴解力養成の授業であれ、講義聴解を目指した授業であれ、上にまとめたスキルのうちのどこまでを授業目標に含めるかは、当該授業がコース内で置かれた位置づけや、担当する教師のたてる到達目標やシラバス・デザインによると考えられる。

そこで、筆者が担当する「講義の聴解」ではどこまでのスキル養成を目指すかについて次に述べたい。

IV. 「講義の聴解」における基本目標

前述のとおり、「講義の聴解」は総合コースの技能別クラスの1科目であり、対象は「大学の授業・研究環境にありながらも、基本的には日本語力がまだ発展途上にある」学習者であり、日本語力ははまだ「中級」レベル相当である。したがって、授業の到達目標もそれに合わせて、「大学での講義を聞き取るのに必要な聞き取りストラテジーを学び、いくつかの講義の聞き取り練習問題を通して、大学での研究・学習生活に支障のない聴解能力を養うことを目的とする。」としている。具体的なスキルとしては、上に述べた一般的な聴解及び講義聴解スキルのうちから次の4項目に絞っている。

- ① 経験や学習による既知知識の活性化
- ② キーワード集中聴解
- ③ 話の流れを追う
- ④ 聞き取った部分をつなぎあわせる推測力の活用

これら4項目のスキルだけで、到達目標の後半部分「大学での研究・学習生活に支障のない聴解能力を養う」を達成することが難しいことは承知している。特に専門講義へとつなげる目的がある以上、上述のスキルB⑤～⑦がまったく取り入れられていない現状には筆者自身が満足できていない。そこで、限られた時間内での日本語学習の中で少しでも目標に近づこうという目的で、次のような追加目標項目を立てている。

- ⑤ 以上の4点をうまく使い、外国語としての日本語での講義であっても何とか理解ができるという自信を学習者につけさせる。

具体的には、次のような活動に分割されて行われる。

- (ア) まずこれから聞く内容について、学習者がすでに知っている事柄について質問してみる。大抵の内容については、それなりに各自の母語で知っている場合が多いということに気づかせる。^{注7}
- (イ) 語彙については、語彙リストを前もって配付してあるので、意味をよく調べて読み方と意味がすぐに結びつくよう予習をしておくようにさせる。
- (ウ) テープから聞き取れた言葉や内容がどんなに少なくとも、自分が持っている既知知識とよくつき比べてみて、テープ内容の全体が把握できないかを確認する。

筆者は、外国語としての日本語学習が成功するか否かの鍵は、結局のところ、学習者が「日本語が分かった！通じた！」ないしは「日本語で自分のしたいことができる！」

と感じ、自信をつけていく過程にあると考えている。^{註8}そこで、上に挙げた1から4までの具体的なスキルを一つひとつつけていくと同時に、「自分の既知知識を外国語としての日本語に活用すれば十分内容が理解できるのだ」という、学習者の心理的な側面の重要性を重視している。ことに「講義の聴解」のように、まだこの日本語レベルからすると大学の講義を問題なく聴講するには不十分とも言える段階の学習者には、心理的な側面からの支援がより一層欠かせないと考える。

そこで、次にスキル目標達成のために筆者が「講義の聴解」授業の中で行っている具体的な教室活動を紹介したい。

V. 「講義の聴解」授業実践例

1. 教科書の各講義における既知知識活性化の試み

主教材『講義を聞く技術』（産能短期大学日本語教育研究室編，産能大学出版部）にある「I 講義を聞く前に」をそのまま使うことはまれであり，ほとんどは別の資料を用意し，あるいは教室でそのままインターネットに接続して実際に該当する箇所のホームページを見せるプレタスク作業をまず行う。その後，各学習者の持つ経験や知識に照らして，今資料で見ている情報の異同を確認してから聴解作業に入るという形で授業を進める。

表 プレタスク活動一覧

講 義	プレタスク活動内容
講義1 「新聞」	1. 日本の新聞の構成を考えるタスクと自国の新聞との比較 2. 為替レートの推移に関する資料 (『日本経済図説 第三版』2001, 宮崎勇・本庄真著, 岩波新書)
講義2 「中央と地方」	1. 日本の地理に関する既知知識の確認 (日本地図など) 2. 現在の日本の人口密度など統計データ (『日本経済図説 第三版』)
講義3 「産業のくみかえ」	1. 講義に登場する日本企業に関する既知知識の確認 2. それら日本企業の職種や製品をインターネットホームページで確認 松下電器 (http://www.matsushita.co.jp/products/index.html) カネボウ (http://www.kanebo.co.jp) 花王 (http://www.kao.co.jp/products/) ミノルタ (http://www.minolta.com/japan/productline/index.html)
講義4 「劇場の歴史」	授業で扱わず。

講義	プレタスク活動内容
講義5 「まなごしの心理学」	1. 錯視やだまし絵に関するインターネットサイト (http://www.br1.ntt.co.jp/IllusionForum/basics/visual/index.html) 2. 教科書49頁, Hess 実験の2枚の写真を比べる。
講義6 「トロン」	1. 「トロン」インターネット公式サイト (http://www.tron.org) 2. ITやコンピュータに関する各自の知識確認
講義7 「バイオテクノロジー」	1. 「バイオ情報普及会」インターネット公式サイト (http://www.cbijapan.com) 2. バイオテクノロジーの現代的话题の確認 「遺伝子組み換え食品」, 「クローン技術」
講義8 「イルカ」	1. イルカに関する既知知識の確認 2. 日本近海で見られるイルカの種類紹介 (http://plaza12.mbn.or.jp/~color_powers/Dol1J.html) 3. 長崎大学ホームページ研究者総覧 (http://www.jrc.nagasaki-u.ac.jp/searchrsc1.php)
講義9 「家族観」	1. 日本の近代から現代にかけての歴史・経済史に関する既知知識の確認 (『日本経済図説 第三版』, 『イミダス』集英社など) 2. 「家族法に関する世論調査」 (http://www8.cao.go.jp/survey/h08/family.html) 3. 家族について自国の歴史の中での考察させる 4. 日本国憲法 (http://kenpou.jp/index1.html) と大日本帝国憲法 (http://constitution.tripod.co.jp/teikoku.htm)

2. 話の流れを把握して、各部分のキーワードからトピックを理解させる試み

講義の流れを視覚的に図示し、各部ごとにトピックやキーワードを質問するタスクを課して流れを整理している。例として講義1(図1)と講義2(図2)を取り上げる。^{注9}

2.1 講義1「新聞」

話の流れ



図1-1 講義1の話の流れ

AとCとEには同じような内容がくりかえされている。()にことばを入れなさい。
「今現在の (経 済) の動きを知るには (新 聞) を読むのが一番いい。」

図1-2 キーワード理解に対する設問

2.2 講義2「中央と地方」

話の流れ

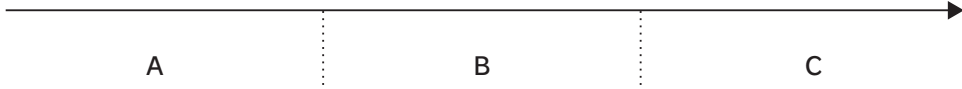


図2-1 講義2の話の流れ

Aの内容をまとめると次のようになる。() にことばを入れなさい。^{注10}
「世界の大都市・(東京)に人も金も物も(吸収)されてきている。」

図2-2 キーワード理解に対する設問

3. 聞き取れたキーワードを既知知識から推測して結びつけ全体の内容を理解させる 試み

『講義を聞く技術』には、講義を聴解する第2部に先立って、聞き取りのストラテジーを学習する第1部がついている。筆者は、第1部の時点からこれから聞く講義の聴解練習の中で次の4点を試みるよう繰り返し学習者に伝えている。

- ① 聞き取ったキーワードをひらがなでもローマ字でもいいから音どおりに書写する。
- ② 辞書^{注11}を用いて、書写したキーワードを意味の分かる日本語として記述し理解する。
- ③ まず学習者自身がキーワードをつなげて、自分の持つ既知知識に照らして全体的内容が分かるかどうかを確かめる。
- ④ 教師＝筆者の示す「話の流れ」やタスクにキーワードを当てはめて全体を理解する。

以上が、「講義の聴解」授業の中で筆者が行っている授業活動とそれを支える「理解促進のための基本目標」である。次に、筆者の授業を評価してみたい。

VI. 現時点までの授業評価

筆者の基本方針と授業活動が「講義の聴解」を受講する学習者のニーズを的確にとらえ実現しているかをみるには本来ならば評価を客観的にみるためのデータが必要である。しかし、筆者はまだそのための調査にまで着手していないため、本稿では筆者自身の自己観察と学期終了時に学習者から得る授業へのコメントをもとに暫定的に評

価をまとめてみたい。^{注12}

A. 学習者より

- ① 既知知識を活性化する授業運営に関して学習者からの支持を得ている。
- ② 学習者各自の専門に関する授業が聞き取りやすくなったという学習者の肯定的評価を得ている。
- ③ テープを聴く聴解なので、本当の講義とは違って内容に集中できないという改善要望が出されている。

B. 筆者の自己観察より

- ④ 本当に「大学での研究・学習生活に支障のない聴解能力を養う」ことにつながっているのか？特に、その理解のプロセスを観察するのは困難を極める。
(Rost 1990^{注13}, 1994: 93ff)
- ⑤ 学習者が理解できたかを教師側で知る手段としての「最終目標」をどこに据えるか？ノート・テイキング？(Chaudron *et al.* 1994, Dunkel 1988, 重松・長谷川1988, 富谷1990^{注14})あるいは、その先に待ち構えている筆記試験やレポート？(平尾1999)

VII. 「講義の聴解」授業の現時点での問題点と今後へ向けた課題

最後に、前項の評価を受けて、「講義の聴解」授業の現時点での問題点と今後へ向けての課題を挙げて本稿を締めくくりにする。

- ① 時間配分の難しさと教師の授業コントロールへの一層の努力が必要
筆者自身の悪い癖で、つい熱が入りすぎて学習者の既知知識を活性化する部分に時間を取りすぎてしまうことがままある。活性化は言わば聞き取りのための前段階に過ぎず、本来の聴解部分^{注15}により多くの時間が確保できるよう自己コントロールが要る。
- ② 学習者のニーズの再調査と授業評価のデータ収集の必要性
前項でも触れたが、今まで筆者は「講義の聴解」授業を評価するためのデータ収集を十分に行ってきたとは決して言えない。特に、客観的な統計調査をするためのデータ収集と学習者のニーズを今一度調査して授業運営に反映させることが必要である。
- ③ 本物の大学の授業へとつなげられるような講義聴解授業の新規開設
現在の「講義の聴解」は、実際の大学の授業におけるノート・テイキングや、その先の定期試験のことを想定したレベル設定にはなっていない。これらの技

能までも含んだ講義聴解のための授業を新たに新設することを考える必要がある。^{注16}

④ 実際の教養的科目で行われている講義を利用して撮影し、教材化するプロジェクト

一部日本語力が高い学生が教養的科目の授業に出席して戻ってくると、「先生が黒板に書く字が汚くて読めない。」とか、「ぼそぼそと話していて分からない」、「方言で話すので分からない」といった、金沢大学に来る留学生だからこそ考えなければならない問題が浮かび上がってきた。そこで、金沢大学の教養的科目で実際に開講されている授業を素材に撮影して、聴解教材とするためのプロジェクトを起こす企画を検討している。^{注17}

⑤ 日韓共同理工系学部留学生のための専門日本語聴解授業への応用

筆者は留学生センターで日韓共同理工系学部留学生の受け入れを担当し、彼らの専門日本語の「聴解」授業も同時に担当している。本稿で取りあげた問題は専門日本語の場合でも十分に応用可能であると考え。逆に、専門日本語聴解授業から、今後「講義の聴解」のために活用できる発見も十分出てくる可能性もあるだろう。

【参考文献】

- Anderson, A. and T. Lynch (1988) *[Language Teaching : A Scheme for Teacher Education] Listening*, Oxford, Oxford University Press
- Chaudron, C. and J.C. Richards (1986) The Effect of Discourse Markers on the Comprehension of Lectures, *Applied Linguistics*, 7-2 : 113-127
- Chaudron, C., L. Loschky and J. Cook (1994) Second Language Listening Comprehension and Lecture Note-Taking, In Flowerdew [ed.] : 75-92
- Dunkel, P.A. (1988) The Content of L1 and L2 Students' Lecture Notes and its Relation to Test Performance, *TESOL Quarterly*, 22-2 : 259-281
- Field, J. (1998) Skills and Strategies : Towards a New Methodology for Listening, *ELT Journal*, 52-2 : 110-118
- Flowerdew, J. [ed.] (1994) *Academic Listening : Research Perspectives*, Cambridge, Cambridge University Press
- Flowerdew, J. (1994) Research of Relevance to Second Language Lecture Comprehension -An Overview, In Flowerdew [ed.] : 7-29
- Flowerdew, J. and L. Miller (1997) The Teaching of Academic Listening Comprehension and the Question of Authenticity, *English for Specific Purposes*, 16 : 27-46
- Hansen, C. and C. Jensen (1994) Evaluating Lecture Comprehension, In Flowerdew [ed.] : 241-268
- 長谷川恒雄 (1984) 「ノート・ティキング考—上—」, 『日本語と日本語教育』 13 : 35-51, 慶應義塾大学国際センター
- 長谷川恒雄 (1985) 「ノート・ティキング考—中—」, 『日本語と日本語教育』 14 : 33-46, 慶應義塾大学国際センター
- 平尾得子 (1999) 「講義聴解能力に関する一考察- 講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題点-」, 『日本

- 語・日本文化』25：1-21，大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- Jordan, R.R. (1997) *English for Academic Purposes: A Guide and Resource Book for Teachers*, Cambridge, Cambridge University Press
- 金久保紀子・金仁和・本田明子・松崎寛 (1993) 「講義の日本語における理科系・文科系の特徴」, 『日本語教育』80：74-90，日本語教育学会
- Kerans, M.E. (2001) Simulating the Give-and-Take of Academic Lectures, *TESOL Journal*, 10-2-3：13-17
- MacDonald, M., R. Badger and G. White (2000) The Real Thing?: Authenticity and Academic Listening, *English for Specific Purposes*, 19：253-267
- Munby, J. (1978) *Communicative Syllabus Design: A Sociolinguistic Model for Defining the Content of Purpose-Specific Language Programmes*, Cambridge, Cambridge University Press
- 太田亨 (2000) 「『総合日本語コース』の創設と今後の展望」, 『金沢大学留学生センター紀要』3：141-150
- Powers, D.E. (1986) Academic Demands Related to Listening Skills, *Language Testing*, 3-1：1-38
- Richards, J. C. (1983) Listening Comprehension：Approach, Design, Procedure, *TESOL Quarterly*, 17-2：219-240
- Rost, M. (1990) *Listening in Language Learning*, London, Longman
- Rost, M. (1994) On-Line Summaries as Representations of Lecture Understanding, In Flowerdew [ed.]：93-127
- 重松淳 (1986) 「大学の講義スタイル分析のための予備調査報告—留学生の聴解授業のために—」, 『日本語と日本語教育』15：53-72，慶應義塾大学国際センター
- 重松淳・長谷川恒雄 (1988) 「講義の聴解指導」, 『日本語教育』64：99-108，日本語教育学会
- 富谷玲子 (1990) 「大学準備教育でのノート・テイキング—専門教育への橋渡しとして—」, 『日本語と日本語教育』19：65-80，慶應義塾大学国際センター
- Tudor, I. (1996) *Learner-Centredness as Language Education*, Cambridge, Cambridge University Press
- Ur, P. (1984) *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge, Cambridge University Press
- 山本富美子 (1994) 「上級聴解力を支える下位知識の分析-その階層化構造について-」, 『日本語教育』82：34-46，日本語教育学会
- 山本富美子 (1995) 「講義，対談等のメカニズム—テキスト分析を通して—」, 『日本語教育』86：13-25，日本語教育学会

【付 録】「講義の聴解」平成14(2002)年度後期シラバス

回	日 付	授業トピック	授業活動内容
1	2002/10/16	オリエンテーション，練習12	教科書の紹介と授業の進め方 区切れ，フィラー
2	2002/10/23	小テスト1，練習34	音の変化(1)&(2)
3	2002/10/30	小テスト2，練習56	キーワードの目立たせ方，繰り返し
4	2002/11/13	小テスト3，練習78	言い間違い，予測
5	2002/11/20	小テスト4，講義1	「新聞」
6	2002/11/27	小テスト5，講義2	「中央と地方」
7	2002/12/04	小テスト6，講義3	「産業の組みかえ」
8	2002/12/11	中間試験	第1回から第7回までの内容からの試験
9	2002/12/18	試験講評，講義5	「まなざしの心理学」
10	2003/01/15	小テスト7，講義6	「トロン」

回	日付	授業トピック	授業活動内容
11	2003/01/22	小テスト8, 講義7	「バイオテクノロジー」
12	2003/01/29	小テスト9, 講義8	「イルカ」
13	2003/02/05	小テスト10, 講義9	「家族観」
14	2003/02/12	小テスト11, ビデオによる聴解	「マネジリアル・グリッド理論」
15	2003/02/19	期末試験	第9回から第14回までの内容からの試験

教科書：

『講義を聞く技術』産能短期大学日本語教育研究室編，産能大学出版部，2,200円

授業の目標：

大学での講義を聞き取るのに必要な聞き取りストラテジーを学び，いくつかの講義の聞き取り練習問題を通して，大学での研究・学習生活に支障のない聴解能力を養うことを目的とする。

学生の学習目標：

各学生が母国・派遣元国で身に付けてきた知識を総動員して日本語で行われる講義が理解できるようにする。

成績：

試験60%（中間30%＋期末30%），小テスト平均20%，出席率10%，授業参加度10%

「講義の聴解」の目指す理解促進のための基本目標と授業活動について

太田 亨

要 旨

本稿は，筆者が金沢大学留学生センターの総合日本語コース・技能別クラスで担当する「講義の聴解」を巡り，まず習得目標とする5つの聴解スキルを示し，次に既知知識活性化のためのプレタスク活動を中心とした授業活動を紹介した。その上で，授業評価を行い今後の課題を提示した。

On the Objective and Class Activities for Fostering Listening Comprehension in the "Listening Course for Lectures" Class

Akira Ota

ABSTRACT

This paper presents five listening skills for my "Listening Course for Lectures" as one of the skill-specified classes of the Integrated Japanese Language Program in the International Student Center at Kanazawa University, and pre-tasks for attaining those skills.

After that, I assessed my class introspectively and proposed to improve several points for the near future.

-
- 注1 時間割・教科書などの詳細については最新学期のものを付録として添付してある。
- 注2 以下「総合コース」と略記，総合コースの創設時の詳細については太田（2000）参照のこと。
- 注3 C2レベルは2000年10月から設置されたレベルで，それまでのCレベルに相当する。
- 注4 これらの項目は山本（1994）及び山本（1995）が主張するような階層的に必ずしも配置されているわけではない。なお，この山本（1994：44）の「階層化構造」に対しては，平尾（1999：12）が「語彙種の使い分けといった語彙処理能力」の観点から異論を唱えている。
- 注5 Anderson & Lynch (1988), Ur (1984), Field (1998) などをもとに筆者がまとめた。
- 注6 Chaudron & Richards (1986), Powers (1986), Dunkel (1988), 重松・長谷川 (1988), Flowerdew (1994), Chaudron *et al.* (1994), 金久保他 (1995), Jordan (1997), 平尾 (1999) などをもとに筆者が整理した。
- 注7 以下に述べる「既知知識活性化の試み」は，特に学習者の既知知識自体が乏しい場合に対処するために行っているものである。
- 注8 Tudor (1996) の言う「Learner empowerment」(p. 25ff) のうち，特に「Learner involvement」(pp. 27, 62-4, 199) に包含される側面でもある。しかし，Tudor が言うような「Learner-centredness」を学習者に求めるには学習者の動機付けがかなりのレベルまで高まっていくことがまず必要であり，同時に教師側の不断の自己改善努力も求められることになる (p. xiv, 248ff)。しかしその反面，Tudor 自身が認めているように (p. 34, 65)，学習者の中には言語学習にそこまでのニーズを感じないまま授業を受けていることも十分にあり得る，と本稿筆者は担当授業を通じて感じている。
- 注9 今回，図1-2と図2-2には（ ）内に正解を入れてある。
- 注10 Bは日本の都道府県別人口密度を表に記入するタスク（教科書29頁），Cは日本の主要都市の宅地価格推移を表すグラフを同定させるタスク（同30頁）がある。なお，後者のタスクのグラフはテープで述べられている数字を正確に表していないと思われる箇所が複数あるため，筆者がグラフを作り直したものをプリントで配付して使用している。
- 注11 時間を短縮するために，学習者には経済的に可能ならば電子辞書の使用を勧めている。
- 注12 客観的評価のためのデータ収集は，最後のまとめに述べるように，今後最優先の課題とした。なお，

調査・分析方法については、現在、6つの専門分野における聴解力を含めた必要言語スキルをアンケート調査・分析した Powers(1986), Hansen & Jensen(1994) の「T-LAP test」、及び中・上級レベルの日本語学習者が講義聴解において抱える問題を調査・分析した平尾(1999)などを読んで検討しているところである。

注13 Rost(1994: 95) からの引用による。なお、この Rost(1990) は4段階の独立かつオーバーラップする「stage」モデルを提唱している。

注14 ノート・テイキングおよび取ったノートの質的な重要性に関してはどの先行研究でも認められているが、どの程度、かつ、どのような内容のノートをとらせるべきかに関してはさまざまな意見が出されていると言ってよい。たとえば、「問題は話を如何に論理的に整理して聞くかであり、(中略)概念に従って話を整理・書く能力」までを理想とする重松・長谷川(1988: 107)がある一方、「過不足なく引用できるように聞くことが講義聴解の基本」という平尾(1999: 3)のような考え方もある。本稿筆者の最終的な方針はまだかたまっていないが、現時点では、ノート・テイキングには基本的に要求される項目のほかに、当該講義における学習者自身の理解を促進させるための個人的な側面が多分にある、つまりノート・テイキングはあくまでも学習者個人の自由意志に基づく作業である、という点も見逃せないと考えている。

注15 Field(1998: 111ff)が言うように、ただ聴解問題を解かせるのではなく、真に聴解力を伸ばすための活動に主眼を置かなければならない。

注16 長谷川(1984, 1985), 重松(1986), 重松・長谷川(1988), 富谷(1990), Flowerdew & Miller(1997), 平尾(1999), Kerans(2001)などの試みは、本稿筆者自身にできるかどうか、または必要とするかどうかは別としても、具体的な活動を考える上で大変参考になる。

また、平成15(2003)年度後期から筆者は学部の教養的科目の言語科目「日本語B」でも「講義の聴解」を受け持つことになった。こちらはすでに学部正規生の日本語力がある学習者であり、教養的科目や専門基礎科目などの授業も同時に受講していることから、筆者がここで触れたノート・テイキングや定期試験までも想定した授業ができるのではないかと期待している。

注17 富谷(1990: 73-4)や MacDonald *et al.*(2000: 264-5)では、講義のビデオを使うことの長所と短所についての議論があり、特に後者は実際の講義を使ったほうがよいとの結論に達している。また、論文の趣旨は「市販教材と実際の講義スクリプトの比較」と異なるが、Flowerdew & Miller(1997)も MacDonald *et al.*(2000)と似た結論を述べている。

筆者も基本的には MacDonald *et al.*(2000)の主張に賛同するが、専門の内容や協力して講義を行ってくれる講師の問題などを考えて、ビデオ教材の撮影プロジェクトを開始するという個人的結論に達した。